

朱雀帝と光源氏

——『源氏物語』ノート——

鈴木 日出男

朱雀王朝は、桐壺院の崩御に及んでにわかに、外祖父右大臣による専制化の傾向を示しはじめた。

(1) (桐壺帝が) 御位を去らせたまふといふばかりにこそあれ、世の政をしづめさせたまへることも、わが御世 (桐壺帝治政の時代) の同じことにておはしまいつるを、(桐壺院崩御後) 帝はいと若うおはします、祖父大臣、いと急にさがなくおはして、その御ままになりなん世を、いかならむと、上達部、殿上人みな思ひ嘆く。

中宮 (藤壺)、大将殿 (源氏) などは、ましてすぐれてものも思しわかれず。 (賢木卷、九〇頁)

右の、桐壺院崩御後の情況を語る叙述でも明らかなように、桐壺院在世中の朱雀王朝は、その上皇としての威権が発揮されていたらしく、前代をほとんどそのまま継承したような治政であった。そして桐壺院崩御後、政の實質的な権勢が右大臣側の掌中に収められたということであるから、朱雀王朝における帝自身の自主性はほとんど

見出しがたいといつてよい。そのような朱雀帝のありかたが、あらためて帝自身の側から次のように語り起こされてもいる。

(2)帝は、院の御遺言たがへず、あはれに思したれど、若うおはしますうちにも、御心なよびたる方に過ぎて、強きところおはしまさぬなるべし、母后、祖父大臣とりどりにしたまふことは、え背かせたまはず、世の政、御心になはぬやうなり。

(同、九六頁)

朱雀帝は、故桐壺院の、東宮擁護と源氏重用を依頼する遺言(八八頁)に違うまいと、それを感動的に受けとめていただけに、右大臣側による専制化を「世の政、御心になはぬ」としている。したがって、ただ無自覚のまま摂関家に操られているわけでもない。いったい右の(1)(2)では、ともに「若うおはします」と繰り返されているが、当年二十六歳の帝は無条件に若いとはいえない。これはおそらく、聖代の帝王としての桐壺院との相対から、前述のごとき帝の自主性のない位相を示す言辭なのであろう。いわば右大臣家の私欲がつけこむすきのある分だけ、桐壺聖代の直接的な皇嗣でありえないということにもなる。こうした治政の具体的な転換は、「若う」「御心なよびたる方に過ぎて、強きところおはしまさぬ」という性格の朱雀帝に対して、右大臣の「いと急にさがなく」という性格、あるいは大后の「御心いちはやくて、かたがた思しつめたる事どもの報いせむ」(九四頁)とする性格と思惑が相応するところから実現されてくるのである。

右のように朱雀帝は、右大臣一統に操作されざるをえない外貌を見せつつも、それを潔しとしない内面をかかえこんでいる。いったい物語への朱雀帝の登場はこの桐壺院崩御前後がほぼ最初にあたるといつてよいのだが、以後その人間像が外側と内側に区別されながら造型されている点に注目すべきであろう。

雲林院參詣から歸つた源氏が、東宮との対面を終えた藤壺を迎えるべく参内し、そのついでに朱雀帝と昔今の物語を交すという条。これは、源氏と藤壺の緊張關係を語る物語の大筋からはやや逸れているけれども、朱雀王朝と源氏の關係のあり方としては抜きがたく重要な叙述である。

まづ内裏の御方に参りたまへれば、のどやかにおはしますほどにて、昔今の御物語聞こえたまふ。御容貌も、院にいとよう似たてまつりたまひて、いますこしなまめかしき氣添ひて、なつかしうなごやかにぞおはします。かたみにあはれと見たてまつりたまふ。尚侍の君の御ことも、なほ絶えぬさまに聞こしめし、けしき御覽ずるをりもあれど、「何かは、今はじめたる事ならばこそあらめ、ありそめにけることなれば、さも心かはさむに、似げなかるまじき人のあはひなりかし」とぞ思しなして、咎めさせたまはざりける。よろづの御物語、文の道のおぼつかなく思さることどもなど、問はせたまひて、またすぎずきしき歌語りなども、かたみに聞こえかはさせたまふついでに、かの齋宮の下りたまひし日のこと、容貌のをかしくおはせしなど語らせたまふに、我もうちとけて、野宮のあはれなりし曙も、みな聞こえ出でたまひてけり。

二十日の月やりやりさし出でて、をかしきほどなるに、朱雀「遊びなどもせまほしきほどかな」とのたまはす。源氏「中宮の今宵まかでたまふなる、とぶらひにものはべらむ。院ののたまはせおくことはべりしかば、また後見仕うまつる人もはべらざるに、春宮の御ゆかり、いとほしう思ひたまへられはべりて」と奏したまふ。朱雀「春宮をば今の皇子になしてなど、のたまはせおきしかば、とりわきて心ざしものすれど、ことにさし分きたるさまにも何ごとをかはとてこそ。年のほどよりも、御手などのわざと賢うこそものしたまふべけれ。何ごとにもはかばかしからぬみづからの面おこしになむ」とのたまはすれば、源氏「おほかた、

したまふわざなど、いとさとく大人びたるさまにもしたまへど、まだいとかたなりに」など、その御ありさまも奏したまひて、まかでたまふに、……

(賢木卷、一一五〜七頁)

右の条全体が、桐壺院追懐の情を媒とする源氏と帝の共感によって貫かれている。そして帝の風貌に故院の面影が見られることを通して、源氏は朱雀帝の中に故院の血脈の流れていることを強く意識している。そのことは、ここでの帝が右大臣家の単なる傀儡にとどまる存在でないことを証すことにもなる。さらにいえば、『岷江入楚』が「源の院に似給ふよと朱雀にもおぼす也。互にあはれと故院の御事を思ひいで給ふなり」と説くように、ここでの二人の共感とともに故院の皇子であることを確認しあうところで成り立っている。逆にいえば、源氏と相對することによって、帝の故院追慕が鮮明になりえたということでもあろう。

その朱雀帝が源氏に問う「文の道のおぼつかなく思さるることども」とは政道上の論議を指しているようから、ここには源氏の、朝廷の後見役としての風姿がうかがえよう。いわば、故院の「大小のことを隔てず、何ごとも御後見と思せ」(賢木卷、八八頁)とする遺言が、少なくともこの場かぎりには遵守されている体である。そしてこの政道に関する話題が、尚侍の君(朧月夜の君)の一件、あるいは「すきすきしき歌語り」や斎宮母娘の一件とほとんど同次元の話題として連鎖している点に注意されよう。もとより源氏の朧月夜の君との逢瀬は、帝の后を犯す不義密通の罪を意味しない。彼女は后ではなく尚侍であり、しかもその逢瀬の始まりは出仕以前に溯る。咎められるとすれば、むしろ、そのような身で出仕したことじたいに問題がある。したがって帝が「今はじめたる事ならばこそあらめ、ありそめにけることなれば」とするのは、その限りで正当な考え方である。しかし右の文脈によれば、「……とぞ思しなして」とあるのだから、帝に不満がないわけでない。通行の読み方に従えば、

内心の忿懣を「さて心かはさむに、似げなかるまじき人のあはひなりかし」とまで「思しなして」いる点に、帝の柔和な性格のゆえんがある、と解されている。そのことじたいは誤りでないけれども、しかしここでは、故院回顧の共感を媒介に源氏のすぐれた資質を納得せざるをえない気持の方が、重々しく作用していよう。そのような共感から帝も源氏も、齋宮やその母御息所との秘かな恋を語り出してしまふのだが、逆にそのことを通して二人の共感がさらに深められてもゆく。帝が諒闇中にもかかわらず晩秋の月の興趣から「遊びなどもせまほしきほどかな」と言い出すあたりに、感動の最高の高まりがあるが、ここにも、すぐれた学芸の出現によって証される桐壺聖代への追懐がこめられているはずである。なぜならこの発言が、この条の直後の、藤壺が過去の遊宴の回想から故院を偲ぶという叙述（一一八頁）に、底部でひびきあうことにもなるからである。

もとより朱雀帝は、出仕以来の朧月夜の君にしたいに魅せられていくのだから、源氏に対する嫉妬と憎悪をはげしく抱いて当然であった。しかしこれをあえて咎めだてようとしないのは、前述したように故院追懐を媒介とする源氏との共同感情が作用しているからである。また繰り返すことになるが、帝が源氏と朧月夜の君を「似げなかるまじき人のあはひ」と考えなおそうとしている点に、源氏という人物は故院の遺言に重用されるだけの抜群の理想人である、という認識がたち働いている。こうしてここでの朱雀帝は、右大臣家の利欲に牽引されることもなく、また自らの利害や打算とも無関係であり、ただ桐壺聖代を重んじてこれに連なるうとする感情だけが純粹に発露されているといつてよい。そうした感情が、源氏との深い連帯を形作っている。次の話題として連接する、下向の齋宮の美貌に魅了されたという一件は、自ら「京の方におもむきたまふな」と別離を宣言せねばならぬ相手に対する恋慕であるだけに、帝にはあるまじき自縄自縛の執着であった。帝としての立場からは、帝位

の存続とも関っている斎宮への恋慕など、決して口外すべき内容ではない。他方、源氏の御息所との離別とても、諦念と執着の複雑に交錯する、あまりに個人的な体験であり、その限りで口外無用の出来事であった。こうした話題が「すぎずきしき歌語り」の一環として打ち明けられているところに、心開いた者同士の話たりうるゆえんがある。自らの体験の感動が、そのまま相手の体験の感動をも引き出していることにもなる。朱雀帝の日常はしよせん右大臣側に繰られるしかないだろうが、ここでの彼は、そうした外部との関連からではなく、その孤立した内部そのものが開陳されるかたちで造型されているのである。

右の引用の後半に転じよう。帝の発言によれば、東宮を朱雀帝の養子とするのが故院の遺言だったとあるが、物語中にはこの記述はない。それはともかく帝には、故院の遺志を実現できない負いめがないでもない。「とりわきて心ざしものす」るだけでは、いかんともなしがたいことを知っている。そうした気持を播曳させながら、東宮の抜群の資質を讚美し、さらに「何ごとにもはかばかしからぬみづからの面おこしになむ」とする発言は重大であろう。ここには、右大臣一統と癒着せざるをえない帝王の不明さ、それを挽回しうる東宮の存在がひそかに主張されているからである。帝としての苦衷が、源氏との心開かれた対話のなかに、さりげなく表白されている。それだけにこの発言は、対する者のうかつには応じえない皇位継承、とりわけ朱雀帝の在位に関わる重大な内容をはらんでいる。東宮の資質を認めつつも「まだいとかたなり」とした源氏の応答からは、決して東宮即位の勸言という意は読みとれまい。しかし、やや深読みではあるが、右に後統する叙述での、ここから退出した源氏が右大臣方の頭弁から「白虹日を貫けり。太子長じたり」と謀反を勧ぐられたという一件は、右の対話と不気味なかたちで照応することになりはしないだろうか。帝と源氏の密かな談話したが、源氏と敵対する者が

らすれば、いかにもいわくありげだし、また格好の話題ともなりうる。もとより源氏を朧月夜の君との一件を理由に罪人に仕立てることはできないけれども、謀反など皇位継承に関わる罪を捏造することは可能である。そのように敵対勢力からきびしく狙われている源氏には、朱雀帝と親密な共感を持ちあうことさえ許されていない。そのことは、朱雀帝とても同じであった。したがって右の対話は、たがいの心内に封じこめておくしかすべのない、つかのまの共感でしかないのである。

前述したように物語における朱雀帝は、ほとんどすべて、右大臣側からの操作を潔しとしない孤立した心内が語られるかたちで登場してくる。左大臣が右大臣専制に堪えかねて辞任するという一件に際しても、「おほやけも心細う思され、世の人も心あるかぎりは嘆きけり」(二三二頁)とある。いうまでもなくその孤独さは、「故院の(左大臣を)やむごとなく重き御後見と思して、長き世の固めと聞こえおきたまひし御遺言」を思うところから発せられている。桐壺院の遺志を第一に尊重しようとする帝の意志そのものは、このあたりの物語のなかで一貫して途切れることがない。帝は、その魂までもが右大臣一統に支配されているわけでない。したがって朱雀帝という人物が常にその孤立した内側から描かれつづけることを通して、物語のなかに桐壺聖代の遺志が屈曲しながら潜流しつづけることになる。そして故院の遺志をそのまま遵守しえない朱雀帝の苦衷は、物語の状況を相対視することのできる一つの目にさえなりえているのである。

ついに源氏は、権勢拡充をめざす右大臣一統による源氏追放の策謀に抗しきれず、自ら須磨へと退去することになった。この須磨流離に際して、物語は朱雀帝の動静をいささかも語ろうとしない。帝の、右大臣方の政略に對する無力ぶりが自明であるのと同様に、心中に故院の遺志が頓挫される苦衷を抱えこまねばならぬのも自明であらう。そのような帝の沈黙が、かえって物語を相対化することにもなる。

あらためて朱雀帝が物語に現われるのは、源氏の須磨移転の数月後である。朧月夜の君への屈曲した思情を通して、源氏とわが身を思う叙述がある。これに関しては後に詳述することになるが、ほぼ同じころ須磨の源氏も朱雀帝に思いを馳せている。

月のいとほなやかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけり、と思し出でて、殿上の御遊び恋しく、所どころ（源氏の愛人たち）ながめたまふらむかしと、思ひやりたまふにつけても、月の顔のみまもられたまふ。二千里外故人心」と誦じたまへる、例の涙もとどめられず。入道の宮の、「霧やへだつる」とのたまはせしほどいはむ方なく恋しく、をりをりの事思ひ出でたまふに、よよと泣かれたまふ。「夜更けはべりぬ」と聞こゆれど、なほ入りたまはず。

見るほどぞしばしなぐさむめぐりあはん月の都は遙かなれども

その夜、上のいととなつかしう昔物語などしたまひし御さまの、院に似たてまつりたまへりしも、恋しく思ひ

出できこえたまひて、「恩賜の御衣は今ここに在り」と誦じつつ入りたまひぬ。御衣はまことに身をはなたず、傍に置きたまへり。

うしとのみひとへにもはおもほえてひだりみぎにもぬるる袖かな

(須磨卷、一九四〜五頁)

よく知られている右の一節は、流離の人の悲情が古来の詩歌によって叙情的に高められた文章であるが、それだけを言つて済ませられない内容をはらんでいる。末尾に定位している「うしとのみ」の歌に象徴されるように、ここでは流離のわが身を思う感涙と朱雀帝の恩寵を回顧する感涙とが交錯しているのも、問題적である。

もとより右の一節は、源氏が「今宵は十五夜なりけり」と気づくところから拓かれていく。「殿上の御遊び恋しく」とは桐壺院在世時代の君臣和柔の宮廷社会に対する追慕にはかならないが、その君臣和柔の連帯が現在あとかたもなく崩れ去つたことを思つていよう。さらに悲嘆の愛人たちへの想像も加わつて、「月の顔」を凝視するばかりだといふ。そしてこの「月」からおのずと連想が飛翔して、月下に二千里のあなたの旧友元九を憶う詩の一節「銀台金闕夕ニ沈々タリ……三五夜中新月ノ色 二千里ノ外故人ノ心……」(白氏文集卷一四、八月十五夜禁中独直对月憶元九)に想到することになる。いったい右の一節全体が「月」をモチーフとしているが、平安朝の詩には遠隔の者同士、天なる月の光を媒として連帯しようとする発想が一般的であった。たとえば、次の『文華秀麗集』中の「送別」の二首などはその典型といえる。

秋日友人ノ別ル

巨勢識人

林葉翻々秋日曬レ 行人独り向カフ辺山ノ雲 唯餘スハ天際ニ孤リ懸カル月 万里ノ流光遠ク君ヲ送ルノミ
月夜離ヲ言フ

桑原腹赤

地勢風牛城まきぶらヲ異ニスト雖モ 天文月兎尚シ光ヲ同ジクス 君ヲ思フコト一ひとへに雲間ノ影ニ似テ 夜々相隨ヒテ

遠キ郷ニ到ラム

ひとり月光だけは旅行く友をいつまでも見送ることになるう、あるいは、どこにいようともし月の光が毎夜友のもとにそそがれるだろう、と言っている。前掲の白詩とて、同じ発想である。これは、異域を超えた友情を確かめることを通して、同僚官人としての連帯感を高めようとする発想であり、実はそこに律令官人としてのあるべき理想が主張されているとも見られるのである。そうした発想の「月」が、ここでは理想の裏がえしとしてふまえられている。つまり宮廷人の心々を繋ぎとめてくれるはずの月が、逆に離反の心々を照らし出すのである。

源氏をはげしく追慕させる藤壺の「霧やへだつる」の歌とは、前述の朱雀帝との対面の後に詠み交された、次のような贈答歌（賢木巻、一一八頁）をさす。

藤壺ここのへに霧やへだつる雲の上の月をはるかに思ひやるかな

源氏月かけは見し世の秋にかはらぬをへだつる霧のつらくもあるかな

右の藤壺の歌で、朱雀帝を「月」に見立てている点が看過できない。藤壺が朱雀帝を歌に詠むことじたいも唐突だけれども、皇統が右大臣権勢にけがされるのを愁いている。この「月」は、諸々の人心を繋ぎとめてくれるものとしての、皇統一般を象徴する言葉であった。これを受けとめる源氏の返歌は、皇威の象徴としての「月」の意をあえて外して、彼女への懸想に転じた。

しかし現在の須磨の地にあつては、一面では藤壺への限りない慕情を揺曳しながらも、かつての藤壺が詠んだ皇威としての「月」に触発され導かれていることになる。それだけに源氏の「見るほどぞ」の歌は、前掲の漢詩

の発想に酷似することにもなる。「月の都」というような「都」を重ねた表現を通して、都からは遠く隔つていようととも月の都を共有しうる感動を歌っているが、これも、皇統のもとに連帯しようとする官人的理想をその発想の基盤に据えている。(ちなみに「松風」巻末の、冷泉帝・源氏・頭中将・左大弁による「月」をめぐる和歌唱和(四〇九〜四一三頁)も、皇統のもとでの共感的発想という点で、これらと共通している。)

この「月」は、当然のことながら朱雀帝を回顧させることになる。前掲の、故院追懷を媒に共感しあつた折をさしている。ただし源氏が朱雀帝から衣を拝領したことは先の叙述に見あたらない。ここでそれが新たに語りこめられることを通して、源氏の皇統に対する尊崇の念がはげしいまでに強調される。いうまでもなくこれは、流罪の菅原道真が醍醐天皇を思つて詠んだ詩「去年ノ今夜清涼ニ待ス 秋思ノ詩篇独リ断腸 恩賜ノ御衣今此ニ在リ 捧持シテ毎日余香ヲ拝ス」(菅家後集、九月十日)による。道真と源氏ではその状況がさまざまに異なっているけれども、皇統本来の正義に訴えることを通して己が身の潔白を証そうとしている点だけは共通しているよう。このような発想によつて源氏は、決して朱雀帝ゆえに流離せざるをえなかつたとも、また朱雀帝は単なる右大臣勢力の傀儡にすぎないのだとも、思つてはいない。あの晩秋の対面での、心開きあつた帝との共感が、増幅されながらここに顧みられていたのである。末尾の歌の「ひだりみぎにもぬるる袖」の語句には、流離の悲涙と帝寵への感涙を言いこめ、そこに源氏の心境が象徴されていよう。

源氏は朱雀帝の存在を、その背後の右大臣一族とは截然と区別して考えていることになる。そして右大臣一統に属さずとも世の趨勢に逆らうまいとする人々は当然、反源氏方の存在となる。そこに源氏の孤立のゆえんもあつた。たとえば紫の上の父式部卿宮。彼は、須磨退居まぢかの源氏とは、世評を憚つて音信さえ交さなかつた

(須磨卷、一六三頁)。後に帰京後の源氏は、これを恨んで過往のように親交しなかったという(濡標卷、二九二頁)。ところで後年、朱雀院は夕霧を相手に、須磨流離事件に関して自ら報復に出ることのなかった源氏の人格の偉大さを絶賛する(若菜上卷、一六頁)。しかし式部卿宮の娘の入内の経緯などから察するに、式部卿宮に対する源氏の報復が皆無だったとは言い切れまい。問題は、世俗を超えた源氏の偉大な人格のありかたというよりも、彼が朱雀帝に対して報復を思わぬどころか一貫してその皇統としての存在を重んじてきたという点にある。それは何よりも朱雀帝が、桐壺聖代を理想視しそれに共感しあえる存在だったからである。実際には右大臣家の傀儡同然にしか機能しないとしても、朱雀帝の、故院の遺戒に従わねばならぬとする存在そのものが、源氏にとってはかけがえないのである。

三

右のように源氏が須磨で帝を回顧するが、そのやや手前のところで、都の朱雀帝が朧月夜の君を相手に苦衷をかみしめていた。その愛憐の情の屈曲した表現に、緊張的な状況にある帝の全存在がかたどられている点、が注目されるのである。

(朱雀帝が朧月夜に対して) いみじかりし御思ひのなごりなれば、人のそしりも知らしめされず、例の上にとさぶらはせたまひて、よろづに怨み、かつはあはれに契らせたまふ。御さま容貌もいとなまめかしうきよらなれど、思ひ出づることのみ多かる心の中ぞかたじけなき。御遊びのついでに、帝「その人のなきこそい

とさうさうしけれ。いかにましてき思ふ人多からむ。何ごとも光なき心地するかな」とのたまはせて、帝「院の思しのたまはせし御心を違へつるかな。罪得らむかし」とて、涙ぐませたまふに、え念じたまはず。帝「世の中こそ、あるにつけてもあぢきなきものなりけれ、と思ひ知るままに、久しく世にあらむものとなむさらに思はぬ。さもなりなむに、いかが思さるべき。近きほどの別れに思ひおとされんこそねたけれ。生ける世にとは、げによからぬ人の言ひおきけむ」と、いとなつかしき御さまにて、ものをまことにあはれと思し入りてのたまはするにつけて、ほろほろとこぼれ出づれば、帝「さりや。いづれに落つるにか」とのたまはず。帝「今まで御子たちのなきこそさうさうしけれ。春宮を院ののたまはせしさまに思へど、よからぬ事ども出で来めれば、心苦しう」など、世を御心の外にまつりごちなしたまふ人々のあるに、若き御心の強きところなきほどにて、(源氏を)いとほしと思したることも多かり。

(須磨卷、一八九〜九〇頁)

前述したように朱雀帝には、故院の遺戒が遵守されているかどうか、一つの指標であった。ここでは源氏を重用できないどころか流離の人とさせてしまったことの慙愧にたえないうえに、さらに東宮を廢太子に追いやりかねない状況に悩んでもいた。ここでは、その故院の遺言にことごとく背いていることの負い目と、そして源氏を諦めきれずにいる隴月夜の君の心をわがものに所有しきれない負い目を、たがいに癒着させあいながら自轉する文体が、朱雀帝の、帝としての、さらには人間としての苦悩を掘りおこしている。つまり、源氏を須磨へ追いやる結果になったことへの悲嘆と自嘲の言葉が、隴月夜の君への執着や皮肉の言葉と微妙に重なりあっている。そのために相手への揶揄が自己へのきびしい嘲弄に転じ、それがまた相手への愛執へと化してゆくように、はげしく転変する文体を形成している。そして帝は、隴月夜の君に執心すればするほど、その心を領略しきれないと

いう敗者の意識をつのらせることになるが、しかし源氏や隴月夜の君への恋の嫉妬や怨恨を徹底させるのではなく、むしろそれをすり抜けて、故院の継承者たりえない自己を凝視せざるをえないのである。この、自己に帰還するしかない密室的な懊悩は、すでに帝と右大臣一統との間の心理的な連帯のないことを証していよう。その意味では、朱雀帝と右大臣一統との権勢機構が、実質的に崩れかかっている。

現在の帝には、かつて源氏とともに故院を追懐したような、心を開きあえる相手がない。源氏あってこそ朱雀帝であるとすれば、源氏の須磨行がかえって朱雀王朝の崩落の時期を早めたといえなくもない。こうした状況に呼応するかのように、物語にはわかにか超自然的な力が作用し、その力によって流離の源氏がついに帰京することになる。朝廷に凶兆がうち続き、故院が源氏と朱雀帝の夢枕に現われる。そして帝の眼病、太政大臣（右大臣）の死、弘徽殿太后の懼病などが続いて、これに恐れを抱いた帝は、太后の反対を押し切って源氏召還の旨を下したのである。帰京後、異例の権大納言に昇進した源氏が、召されて帝と対面した。

御物語しめやかにありて、夜に入りぬ。十五夜の月おもしろう静かなるに、昔のことかきつくし思し出でられて、しほたれさせたまふ。もの心細く思さるるなるべし。帝「遊びなどもせず、昔聞きし物の音ども聞か
で久しうなりにけるかな」とのたまはするに、

源氏わたつ海にしづみうらぶれ蛭の子の脚立たざりし年は経にけり

と聞こえたまへば、いとあはれに心恥づかしう思されて、

帝宮柱めぐりあひける時しあれば別れし春のうらみのこそな

いとなまめかしき御ありさまなり。

ここにも「十五夜の月」とあり、前掲の須磨の場との照応はもろんのこと、「月」じたいが皇統の象徴的な言葉として一貫しているとさえみられる。また「昔のこと」も、桐壺聖代に溯りうる過去の時点をさしていよう。故院追懷を媒とする共感が、ここでようやく戻ってきたことになる。また帝のいう「遊びなどもせず……」の、多年にわたる無感動とは右の共感のなきの別な表現にすぎないだろう。ここでは和歌の贈答によって二人の感動がいよいよ強調されてもいるが、おのずと朱雀帝の、故院の遺言に背いてはいないという晴れ晴れしさもここに投影されていよう。

朱雀帝は東宮への讓位を決意する。その御代替りも近いころ、帝は隴月夜の君を相手に語るが、その屈曲した物言いは明らかに前掲の叙述（須磨巻）と照応するヴァリエーションとみられる。しかし単なる繰り返しでない点にも注意すべきである。

おりあなむの御心づかひ近くなりぬるにも、尚侍心細げに世を思ひ嘆きたまへる、いとあはれに思されけり。帝「大臣亡せたまひ、大宮も頼もしげなくのみ篤いたまへるに、わが世残り少なき心地するになむ、いといとほしう、なごりなきさまにてとまりたまはむとすらむ。昔より人には思ひおとしたまへれど、みづからの心ざしのまたなきならひに、ただ御ことのみなむあはれにおぼえける。たちまさる人また御本意ありて見たまふとも、おろかならぬ心ざしはしもなづらはざらむと思ふさへこそ心苦しけれ」とて、うち泣きたまふ。女君、顔はいとあかくにほひて、こぼるばかりの御愛敬にて、涙もこぼれぬるを、よろづの罪忘れて、あはれにらうたしと御覽せらる。「なとか御子をだに持たまへるまじき。口惜しうもあるかな。契り深き人のために、いま見出でたまひてむと思ふも口惜しや。限りあれば、ただ人にてぞ見たまはむかし」など、行く

末のことをさへのはたまはするに、いと恥づかしうも悲しうもおぼえたまふ。(朱雀帝が)御容貌などなまめかしうきよらにて、限りなき御心地さしの年月にそふやうにもてなさせたまふに(源氏が)めでたき人なれど、さしも思ひたまへらざりし気色心ばへなどもの思ひ知られたまふままに、などてわが心の若くいはいけなきにまかせて、さる騒ぎをさへひき出でて、わが名をばさらにもいはず、人の御ためさへなど思し出づるに、いとうき御身なり。

(濤標卷、三七〇〜二頁)

前掲叙述に比べれば、源氏の言葉の、自己から相手へ、あるいは相手から自己へと転化される度合が緩慢で、その分だけ女君の思念の入り込む余地が多くなっている。帝はまず、祖父大臣の死、大后の病弱と禍の続くところから己が余命の少なさを悲嘆し、ひとり生き残る女君の不安を思う。そこから文脈が「昔より人には思ひおとしたまへれど……」と反転し、源氏を忘れぬ相手への苦々しい皮肉がまじってくる。源氏には及ばぬ自分を、「昔より人には思ひおとしたまへれど……」とも「たちまさる人また御本意ありて見たまふとも……」ともしながら、女君への情愛では決して負けをとらぬとする。この、自分の劣性を逆手にとった懸想には、一種の敗者の意識も伴っているようだが、女々しいまでの恋の執念がうずいている。また後半の、わが子を産んでくれぬ口惜しさから、いくら源氏の子を産んでも臣下の人間でしかない、とする言辞においても同様である。これが前掲「須磨」巻の叙述と最も異なる点は、純粋に男女関係が強調されいよいよ情痴話めいている点である。前者が帝王としての、人間としての苦衷であったのに対して、これはいわずに人間的な苦悶に終始している。こうした変質の由因は、何よりも朱雀帝が故院の遺言の遵守されているかどうかを苦慮しなくなったからである。つまり、源氏の政界への帰還によって、おのずと遺戒が実質的に甦ろうとしているからである。

かくして朱雀帝は、この人間的なるものへの変転と呼応して、帝王の座から退くことになる。他方源氏は、朱雀帝退位後も故院の遺戒に規制されながら、冷泉帝の後見役として関りつづけていく。しかし源氏にそのような道が拓かれるようになるのには、桐壺院の後継者としてその遺戒に執した朱雀帝の存在が、やはり必須であったともみられるのである。

ここで一つの補足をしておこう。朱雀院の人物造型が、明らかに讓位を機に変貌を呈してくることは、後続の物語と比べても知られるはずである。讓位直後に「のどやかに思しなりて、時々につけて、をかしき御遊びなど好ましげにておはします」(濤標卷、二九〇頁)という生活が始まり、また、かつて源氏に告白したこともある前齋宮への恋情もあらためて燃えあがってくる。その願望は彼女の冷泉帝入内のために叶えられなかったけれども、その入内を祝って贈物を寄せ、あるいは断ちがたい恋情を源氏に打ち明け、さらに御前の絵合には彼女の勝利のために秘藏の絵を贈るなど、その切ない執心を抱きつづける生身の人間像が描出されている。また、いわゆる第二部では、女三の宮を溺愛しつづける父親像が強調され、そのことが彼女の六条院降嫁を実現させもする。とりわけ、その愛娘の不例を知った院が、出家の身をも顧みず下山して自らの手で受戒されることになる条の、女々しいまでの惑乱は、煩惱に翻弄されるしかない人間苦を生々しく描いている。このように讓位後の朱雀院は、いわずに人間的な哀歓によっている。しかも、過往のごとく、閉塞的な状況のなかに孤立した内部を、からも開陳するという方法で造型されるのではない。多様な外的状況に対応しつつ、院の多様な感情がひき出されてくるのである。

見てきたように朱雀帝は、これを操作しようとする右大臣の一統と同様には、源氏と対立する存在ではなかった。傀儡の帝と言ひ済ませるだけでは当たらない。物語登場のたびごとに、ひとり密室的な苦衷をかかえこませられているこの帝王は、桐壺聖代の理想性を標榜しながら源氏と共感しあっている。そのような朱雀帝なればこそ、右大臣一統とは十全の連帯感を持ちえないのである。その意味で、右大臣一統の摂関権勢ははじめから朱雀王朝の崩落の危機をはらませていた。朱雀帝の時代は、最終的にはそれを揺さぶるべく故院の靈力など超自然的な力が決定的に作用することになるが、それとは別に王朝じたいの内部から徐々に瓦解の方向へ歩み出していたといつてよい。源氏が自ら運命を開こうとせずとも、朱雀王朝自体がそれを呼びこもうとしていたのである。

もとより源氏という人物は、その生涯にわたつて桐壺聖代を理想視し、それへの回帰を精神の拠り所としているが、それはこの朱雀帝との連帯においてはじめて明確に自覚されたといつてよい。これは単なる回顧趣味の精神でもなければ、逆境の現実からの逃避の精神でもない。

いったい源氏によつて後援される冷泉王朝は、第二の桐壺王朝であるともみられよう。逆に朱雀帝の時代は、桐壺院の遺志を継承しえなかつたという意味において、いわば括弧つきの王朝でしかなかつた。その朱雀帝が、やがて冷泉帝へと交替するのには、源氏と朱雀帝の交渉が意外なまでに重要だつたことになる。朱雀帝の実現しえなかつた桐壺院からの直伝が、源氏を媒として一代隔つた冷泉王朝において実現されるということでもある。源氏の桐壺聖代回顧の精神が、それを如実に証したてることになるだろう。